明応七年六月十一月（ユリウス暦1498年6月30日）の大地震に関する『九州軍記』の被害記述の検討
Examination of the damage description in Kyushu by the large earthquake on June 30th, 1498 on a war chronicle

*原田 智也[1]、西山 昭仁[1]、佐竹 健治[1]、古村 孝志[1]
*Tomoya Harada[1], Akihito Nishiyama[1], Kenji Satake[1], Takashi Furumura[1]

1.東京大学地震研究所
1.Earthquake Research Institute, The University of Tokyo

京都・奈良の日記には，明応七年六月十一日（ユリウス暦1498年6月30日）の申の刻（午後3〜5時）に“大地震”と記録されている．また，江戸時代に編纂された史料では，鹿児島県から山梨県にかけて大地震が記録されている．特に，江戸時代初期に書かれた『九州軍記』という軍記物語には（以下，“軍記”と呼ぶ），九州地方における，この地震による大被害が記述されている（ただし，地震の発生時刻は，巳の刻（午前10〜12時）と書かれている）．軍記は，明応七年六月十一日の地震から100年以上後に書かれた文学作品であるにもかかわらず，九州における地震被害の記述は，多くの地震学者に無批判で受け入れられ，この地震の震源を推定するための情報として重要視されてきた．
宇佐美（1987）は，軍記における記述の信頼性は低いとしながらも，京都およびその以東で申の刻に記録された地震と，軍記に記述された巳の刻の地震とを別々の地震と考え，巳の刻の地震の震央を日向灘に推定した（M7.0〜7.5）．ただし，震央の精度は100km程度としている．都司・上田（1997），都司（1999）は，軍記の被害記述の一部を津波の描写であるとし，また，中国上海における同日の水面動揺（宇津，1988）も同じく津波であると考え，六月十一日の地震を，同年八月廿五日（9月11日）に発生した明応東海地震に先行した南海地震であると主張した．石橋（1998，2002，2014）は，軍記の記述と上海の水面動揺を津波とする解釈には無理があることを指摘し，さらに他の史料の精査により，六月十一日の地震は南海地震でありえないとした．なお，石橋（1998，2002，2014）は，この地震が，1909年宮崎県西部の地震（M7.6）のような，九州下のスラブ内大地震である可能性もあるとしている．また，「［古代・中世］地震・噴火史料データベース（β版）」では，「14〜16時頃に京都で強い地震の揺れを感じた。被害は記録されていない。三河の堀切や熊野地方の新宮も強く揺れた模様。この日午前10時頃に日向灘で大地震が起きて九州で大災害とする説があるが、根拠とする『九州軍記』の記事は疑問である。」という綱文が立てられている．以上のように，この地震の震源について議論が続いているが，この議論を解決するには，九州における地震被害の有無を検討する必要がある．そのためには，軍記における被害記述の信頼性を確かめる必要があるので，本研究では，軍記の成立過程と被害記述の検討とを行った．
その結果，以下の理由により，軍記における被害記述の信頼性は非常に低いと考えられ，明応七年六月十一日の地震による九州での大被害の有無は不明，あるいは，無被害である可能性も高いことが分かった．したがって，六月十一日巳の刻の地震が日向灘の大地震であるという説は再考が必要である．（１）地震被害の記述には，具体的な地名が無く，大地震による一般的な被害の描写である印象を受ける．（２）被害記述後に，過去の大地震が列挙されているが，このことから作者が過去の大地震を調べることができたことが分かる．よって，明応七年六月十一日の地震も，年代記等から調べられた可能性がある．（３）誇張された地震発生時刻に関する記述から，この地震が巳の刻に発生したと読めるが，この時刻は，明応東海地震の発生時刻である辰の刻に近い．実際，同時代史料である『親長卿記』や『塔寺八幡宮長帳』では，明応東海地震の発生時刻を巳の刻としている．したがって，軍記の作者が，明応東海地震と六月十一日の地震を混同していた，あるいは，混同して記された史料に基づいて，六月十一日の地震を描写した可能性がある．（４）地震の記述がある章は，明応七年に終わる章と永正二年（1505年）から始まる章との間にあり，文亀三年（1503年）の大飢饉と，度重なる災害による人々の苦しみも記されている．したがって，この章は後に続く物語の舞台設定の性格が強く，地震被害も物語を盛り上げるための創作である可能性も考えられる．（５）軍記には，僧了圓による慶長十二年（1607年）四月と記された序がある．序によると，軍記は，肥前国松浦郡草野村（現福岡県久留米市）において，烏笑軒常念（文禄四年（1595年）没），草野入道玄厚によって書き継がれ，慶長六年（1601年）に完成した．また，軍記完成から約250年後の史料であるが『橘山遺事』によると，了圓も軍記の修

©2016. Japan Geoscience Union. All Right Reserved.

正と補筆を行っていたようだ．よって，玄厚（と了圓）は，文禄五年（1596年）の慶長豊後地震を近くで体験していると考えられ，その体験や情報が軍記の記述に影響した可能性も考えられる．
本研究は，文部科学省委託研究「南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト」の一環として行われた．

キーワード：明応七年六月十一日（1498年6月30日）の地震、『九州軍記』、九州における被害、日向灘地震、明応東海地震
Keywords: June 30th, 1498 earthquake, war chronicle "kyushu-gunki", serious damage in Kyushu, Hyuga-Nada earthquake, Meio-Tokai earthquake

©2016. Japan Geoscience Union. All Right Reserved.